

第3話 帰国入試 男子中編

さてみなさん、帰国入試に対するイメージは何となく湧いてきたでしょうか。
ここから、いくつかの学校を例にあげて、具体的な勉強方法や対策などを考えていきましょう。

一般入試に比べ、帰国枠を設置している学校の絶対数が少ないぶん、その入試パターンはかなり絞られてきます。名前の挙がる学校もだいたい偏ってきます。また、一時帰国をして受験をする、という場合もあるので、実際の出願校もさほど多くはならない傾向です。

今回は、入試科目の特徴ごとに、代表的な男子校を3つ見てみましょう。

特に男子校は、進学校としての色が強く、学校の求める生徒像が入試にもよく表れている気がします。必然的に入試内容も特徴が分かれ、その対策も一筋縄ではいきません。下に挙げる学校も、それぞれ異なった入試科目になっています。

まず1つめは、聖光学院中。帰国入試の男子校の中では、最難関と言ってもいいでしょう。入試科目は、「国・算」もしくは「英・算」の2択で、算数が必須になっています。そして、問題の難易度も非常に高いものです。

国語、英語に関して、決して易しいとは言えません。学校の求める一定の基準を満たした上で、大学入試につながる数学的思考力・応用力のある生徒を求めていることがうかがえます。

この学校を目指すのならば、とにかく算数を鍛えること。テキストを消化するだけではとても足りません。初めての問題でも自分で解法を組み立てられるようであれば、とても手が出ないでしょう。難しい問題にワクワクするようなレベルまで持って行きましょう。

早く受験勉強を始めるのに越したことはありません。

次に海城中。近年入試形態が変わり、A方式（4科+面接）、B方式（算数・総合・面接）、C方式（算数・総合・英語・面接）からの選択となります。Aは日本人学校向け、B・Cが現地校向けの方式と言えるでしょう。ただし算数はA～C共通問題なので、一般入試レベルに劣らない勉強が必要になります。

最大の特徴は「総合」という科目。国語の問題ではありますが、読解・記述に特化したものになっています。学校のホームページにも案内ありますが、これは「PISA」という学習調査問題に準じて作問されています。

下記リンクが「PISA」の問題例です。

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/12/07/1284443_02.pdf
記述対策の重要性がわかりますね。そして面接で課されるスピーチにも通じますが、高いアウトプット力が問われます。時事問題や人文科学などにも興味を持たなければなりません。物事に対して自分の意見が持てるよう、常に訓練をしておく必要があります。

そして攻玉社中。ここは、上記2校と比べて、とても一般的な入試形態です。

科目としては、「英語のみ」か「国・算」の2択と面接。英語に関しては、帰国生らしい高いレベルが求められるので、海外経験の長短によっては歯が立たないかも知れません。しかし、国・算はまじめに取り組んでいれば決して届かないものではありませんので、対策の立てやすい入試と言えるでしょう。

ちなみに、一般入試では1次・2次試験共に受験をすれば「熱望組」として優遇措置がありますが、帰国入試や特別選抜には適用されないとのことでした。

話は少し逸れますが、最後にそれぞれの学校の出願条件をみてみましょう。

都内の中学・高校では、おおよそ1年以上の海外経験、また帰国後3年以内であることが出願条件として申し合わされています。

これが上記の学校ではそれぞれ、

聖光学院中：海外在住が2年以上

海城中：海外在住が2年以上、かつ帰国後1年半以内であること。

攻玉社中：海外在住が2～5年の場合、帰国後2年半以内であること。海外在住が5年以上の場合、帰国後3年以内であること。

(出願条件は変更されることもしばしば)

となっています。自分のライバルはどのような経験を持っているのか、一つの参考になるかもしれませんね。

また、条件は融通が効く場合があるので、微妙な場合は迷わず学校に相談してください。

長くなってしまいましたが、代表的な男子3校を見てみました。共通して言えることは、「一般生に負けない勉強+海外の経験値」です。特に算数を頑張りましょう。

著者：谷口 仁
Apr 25 2016

